

21. 2型糖尿病患者における血中 ANGPTL2 濃度と炎症及び動脈硬化検査値との関連について

埼玉医療センター

¹⁾ 糖尿病内分泌・血液内科, ²⁾ 救急医療科
氏家 淳¹⁾, 鈴木達彦²⁾, 竹林晃三¹⁾, 山内元貴¹⁾,
篠崎浩之¹⁾, 成瀬里香¹⁾, 原 健二¹⁾,
末次麻里子¹⁾, 土屋天文¹⁾, 犬飼敏彦¹⁾

【目的】ANGPTL2 は組織にて慢性的な炎症を引き起こすことが知られおり、動脈硬化性疾患、糖尿病等、様々な疾患との関連性が示唆されている。今回、我々は2型糖尿病患者における血中 ANGPTL2 濃度と炎症マーカー及び動脈硬化検査値との関連性について検討した。

【対象と方法】血糖コントロールが不十分で入院治療を必要とした2型糖尿病患者 (n=70) を対象に空腹時血中 ANGPTL2 濃度を測定し、その各種検査値との関連性を調べた。

【結果】ANGPTL2 は健常者 (n=9) に比し、2型糖尿病患者で有意に上昇していた (3.5 ± 1.1 vs. 2.5 ± 0.4 ng/mL, $P < 0.0001$)。ANGPTL2 は FPG, HbA1c 及び BMI とは有意な相関を示さなかった (それぞれ $P = 0.2335$, $P = 0.1806$, $P = 0.6056$) が HOMA-IR とは正の相関を示した ($P = 0.0419$)。ANGPTL2 は動脈硬化関連検査値である IMT, CAVI-index, LOX-1index とは相関を示さなかった。一方で ANGPTL2 は変性 LDL を反映すると考えられている LOX-1 containing ligand ApoB (LAB) と有意な正の相関を示した ($P = 0.0147$)。更に ANGPTL2 は炎症マーカーである hsCRP, フィブリノーゲン (Fib) と有意な正の相関を示した (それぞれ $P = 0.0457$, $P = 0.0001$)。また ANGPTL2 は eGFR とは有意な負の相関を示したが ($P = 0.0063$)、網膜症の程度とは関連しなかった。

【結論】健常者に比し2型糖尿病患者において血中 ANGPTL2 濃度は有意に上昇していた。ANGPTL2 は血糖コントロールの指標 (HbA1c, FPG) や肥満の程度 (BMI) とは相関せず動脈硬化の指標とも関連しなかったが炎症マーカーや変性 LDL の指標及び腎機能と関連する可能性が示された。

22. 当院で培養検査により診断したスポロトリコーシスの集計と PCR を用いた新規診断法の報告

皮膚科学

藤平尚弘, 林 周次郎, 嶋岡弥生, 石川里子,
鈴木利宏, 井川 健

【目的】スポロトリコーシス症の PCR 診断は確立していない。しかし、スポロトリコーシス症は皮膚組織からの真菌培養で確定診断される疾患であるが、培養技術や採取した菌体量により陰性となることがある。今回、過去に本教室で培養検査によりスポロトリコーシス症と診断した症例を集計するとともに、PCR を用いた新規診断について検討した。

【結果】1975 年以降、当科で真菌培養検査の菌種の同定により診断したスポロトリコーシス 125 症例 (男 63 例女 62 例) あった。年齢は 0 歳から 85 歳 (平均 49.6 歳)。発症地域は栃木県の宇都宮市と壬生町が多く、発症部位は頭頸部 (52%) と上肢・手で (44%) で大多数を占めた。臨床型は固定型が 64.2% と多く、リンパ管型が 15.7%、また頭頸部に多発し固定型、リンパ管型の区別ができない例が 19.0% であった。播種型や皮膚外病変を認めた例は無かった。経過が確認できた症例のうち 111 症例で治療にヨウ化カリウム (KI) が用いられ、KI の総投与量は 10 歳未満では平均 43.3 g で、治癒までにかかった期間は平均 12.8 週、10 歳以上では KI の総投与量は平均 116.2 g で、平均 17.4 週で治癒している。Sporothrix schenckii の特異的配列を標的にしたプライマーを用いての PCR 検査を行ったところ、培養検査で陽性となった症例 20 例は全て PCR 検査においても陽性であった。一方で、臨床的にスポロトリコーシスを疑ったが培養検査が陰性であった症例についても数例で PCR が陽性となった。

【結論、考察】ここ 10 年間で本症と診断した症例は約 10 例に対して、1975 年から 1985 年の間では約 70 例認め、近年は本症の発症が低下傾向であった。PCR による本症の診断については、実用的である可能性があり現在、症例を増やして検討中である。